フィリピンの街で奏でる山村の音楽
――トラヤン・マジョカヨン・アンサンブル

米野（よねの）みちよ　フィリピン大学准教授

他人に何かを伝えるとき、自分が受け継いだものがそのまま伝わるわけではない。個人の体験や思いなどにより、再び編まれたものが他人に受け渡されるのである。

ガンサの練習風景。左端がホセ（撮影・寺田吉孝）

踊る鷹の楽団

トラヤン・マジョカヨン・アンサンブル（以下アンサンブル）は、フィリピン北部カリンガ州の州都タブクを拠点とする、ゴング（ガンサ）や竹楽器類を演奏するグループである。リーダーのホセ・パンシウ（七〇）はボーイスカウト協会を一〇年前に退職後、焼き畑と水田耕作のかたわら、地域の自治活動にもかかわっている。他のメンバーは、妹弟たち、そしてその子どもたちである。「トラヤン」は、鷹を意味し、「マジョカヨン」は、パンシウ家の属する部族の名前である。カリンガ州にはたくさんの先住民のグループが住んでいる。そのなかでマジョカヨンの人びとは、ガンサに合わせて踊る鷹の動きを模した快活なトラヤンの踊りで知られている。

アンサンブルは、時折、要請があると、演奏に出向く。二〇〇〇年代に三回、台湾によばれた。他にも、先住民の集まりや、音楽学の国際学会があったときなどに、マニラで演奏した。しかし、地元では、アンサンブルの出番はじつはあまりない。結婚式などの際のガンサに合わせた踊りでは、参列者たちが次々と自発的に演奏に加わってしまうからである。竹楽器の演奏の機会も少ないが、外からの要請があれば、幾ばくかの練習もするし、壊れた楽器を修理したり作り直したりもする。ホセが演奏と楽器作りの得意技を子どもたち、甥姪たちに伝えるチャンスでもある。

継承の現場で

フィリピン北部の山村に育ったホセは、北部の都市バギオの大学を卒業し、しばらく働いた後、父親が移住したカリンガ州の街タブクに自分も移り、ここで結婚し、七人の子宝に恵まれた。大学時代は、山出身の学生たちのグループ、ビバック（B－BAK）に所属し、そこで、ガンサや他の音楽をメンバーと一緒に演奏した。ここで、他の地域の山地民が、ときには似たような、ときには異なった音楽をすることを知り、自分も他の地域の音楽を真似してみたりもした。また大学の博物館でアルバイトをして、山地民の楽器や民芸品などに名前をつける作業をした。一九七八年には、フィリピンの著名な作曲家ルクレシア・カシラッグらとともに東京に招待され、竹琴、竹口琴、竹笛などを披露した。このような経験が、彼の知的好奇心を刺激し、自分の文化の誇りの基盤になっているようである。

自宅で、自作の楽器に囲まれて（撮影・寺田吉孝）

二〇〇七年からは、弟らとともに、市内の中学校に設置された、政府の伝統文化継承プログラムの講師も務める。今日、継承が難しくなってきている竹笛や叙事詩ウラリムなどを教えるが、先生に指示されるままに出て来るだけの子どもたちに教えても、なかなか効果が出せない。また、アンサンブルは、昨年、タブク市のフェスティバルのコンテストに参加したが、三位だった。台湾でしたように、さまざまな楽器のさまざまな奏法を披露したのだが、五十以上ものガンサを同時に奏するストリートダンス風の大編成のチームが優勝したのには納得がいかない。マジョカヨンの叙事詩ソグソグナの歌詞を書き留めたときは、州の知識人から、スペルが違う、と直された。押韻のため、単語の発音を一部変えることはよくある。正しいスペルで書くと、韻がなくなってしまうため、詩の生命が失われる気がする。地元での伝承の継承は、必ずしも順風満帆ではない。

昨年楽器や竹細工の製品を売る小さな店を始めた。ホセの夢は、子どもたちが竹楽器の制作や竹細工のスキルを身につけること。三女フェリサは、マニラの研究者の支援を受けて、民族音楽学を学ぶ。今は、実家の手伝いをしながら、父ホセのマジョカヨン音楽・文化の知識を整理して修士論文にまとめている。

お店のなかで、妹イサベルと、タンビを披露（楽器を棒で交互に叩く）

アンサンブルは、山村の先住民の音楽を、移住先の街で、外からの程よい刺激を受けながら、次の世代に引き継いでいる、貴重なケースである。筆者は、ホセの誠実な人柄に魅かれ、またアンサンブルの地道な活動を評価している。研究者として何らかの支援ができればと思うが、何もしないほうがいい様な気もする。適度な距離を保ちながら陰から応援していきたい。